

シルクロードが育んだ地域

古くから、さまざまな物語を紡いできたシルクロード。アジアとヨーロッパの懸け橋として、長きにわたり、ヒト、モノの交流に貢献してきた。その通り道として栄えてきたのが、ユーラシア大陸の真ん中に位置する中央アジア。ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国だ。雄大な自然に囲まれ、人々の生活は肥やかな大地に支えられてきた。しかしこの地域には、立ち向かわべき課題がある。

それは、中央アジアの国々が持つ

特集 中央アジア

開かれた地域へ

同じ「アジア」でありながら、日本人にはあまりなじみのない中央アジア。しかし実は国際協力を通じて、さまざまなつながりが生まれている。

編集協力：帝京大学経済学部 杉浦史和准教授

共通点から見えてくる。この5カ国は、かつては旧ソビエト連邦の構成国。1991年の崩壊後に独立を果たしたが、新たな国として歩み始めた道は、決して容易なものではなかった。旧ソ連時代は、インフラ整備や人材育成が着実に進められていたが、独立後、優秀な技術者の多くはロシアに帰ってしまった。それから若い人々を中心に、試行錯誤しながら、文字通り「ゼロ」からの国づくりが懸命に行われてきた。

しかし独立から20年が過ぎた今。「旧ソ連時代から使い続けてきたインフラの老朽化は進むばかり。その一方で、新たに建設されたホテルなどのピカピカのインフラもあり、その対照に戸惑うこともあります」と帝京大学経済学部の杉浦史和准教授は話す。さらに、石油や天然ガスなど資源のある国とない国で開発に差が生じ、地域間で格差が生まれ始めている。

Central Asia

人気漫画家、森薫さんが
イメージキャラクターをデザイン!

中 中央アジア周辺を舞台に、雄大な自然の中で生きる人々の生活と文化に焦点を当てた漫画「乙嫁語り」。「漫画大賞2014」を受賞したこの作品の著者、森薫さんが「中央アジア+日本」対話の10周年を記念してイメージキャラクターを作成した。中央アジア5カ国と日本の国旗の色からイメージしたというキャラクターは、異国情緒あふれる民族衣装を身にまとった女性たち。森さんらしい柔らかなタッチで親しみやすいと好評だ。今後、外務省が実施する「中央アジア+日本」対話の広報や文化行事などのイベントに登場。日本と中央アジアとの交流や相互理解を促進していく。



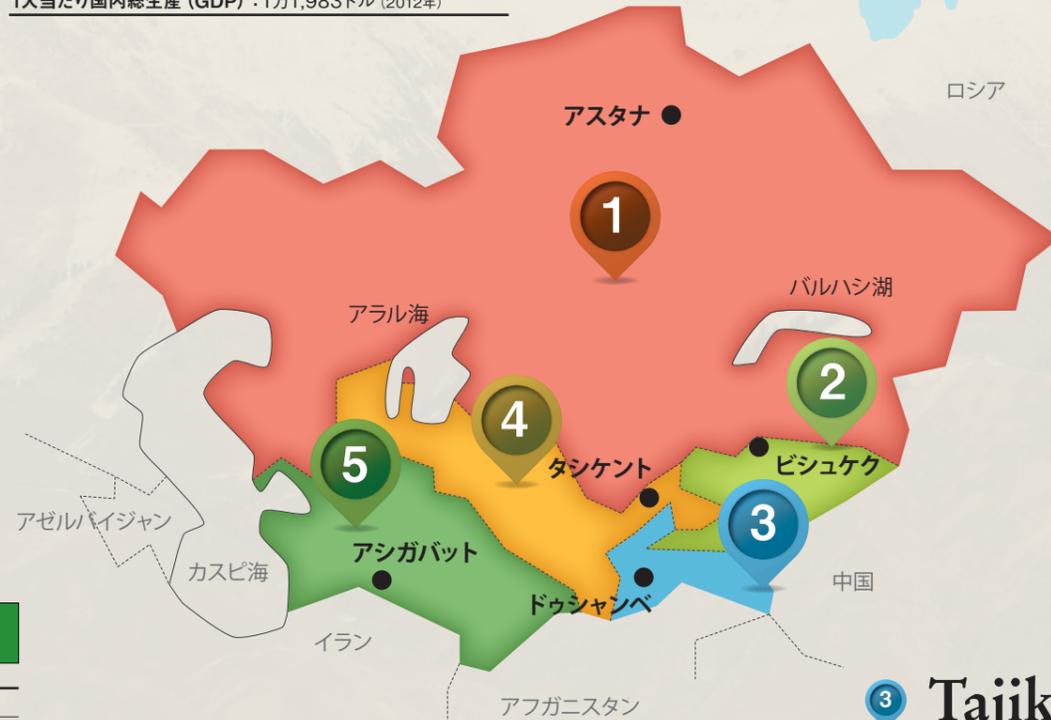
トルクメニスタン
5 Turkmenistan

首都: アシガバット
面積: 48万8,000km² (日本の約1.3倍)
人口: 520万人 (2013年)
言語: トルクメン語、ロシア語
主要産業: 鉱業、農業、牧畜
1人当たり国内総生産 (GDP): 5,998.7ドル (2012年)



カザフスタン
1 Kazakhstan

首都: アスタナ
面積: 272万4,900km² (日本の約7倍)
人口: 1,640万人 (2013年)
言語: カザフ語、ロシア語
主要産業: 鉱業、農業、冶金・金属加工
1人当たり国内総生産 (GDP): 1万1,983ドル (2012年)



ウズベキスタン
4 Uzbekistan

首都: タシケント
面積: 44万7,400km² (日本の約1.2倍)
人口: 2,890万人 (2013年)
言語: ウズベク語、ロシア語
主要産業: 綿織維産業、食品加工、機械製作、金、石油、天然ガス
1人当たり国内総生産 (GDP): 1,367.1ドル (2010年)



Central Asia

キルギス
2 Kyrgyz

首都: ビシュケク
面積: 19万8,500km² (日本の約2分の1)
人口: 550万人 (2013年)
言語: キルギス語、ロシア語
主要産業: 農業、畜産業、鉱業
1人当たり国内総生産 (GDP): 1,158ドル (2012年)

タジキスタン
3 Tajikistan

首都: ドウシャンベ
面積: 14万3,100km² (日本の約4割)
人口: 820万人 (2013年)
言語: タジク語、ロシア語
主要産業: 農業、アルミニウム生産、水力発電
1人当たり国内総生産 (GDP): 953.3ドル (2012年)

参考: 外務省ホームページ

関係づくりも課題として挙げられている。「二国一力が力をつける努力をしながら、近隣国の情勢にも対応していかなければなりません」と杉浦准教授。特にテロや難民など多くの問題を抱えるアフガニスタンに対しては、国際社会と連携しながら、アメリカ軍撤退後の動きに注意を払っていかねばならない。

エネルギー資源の供給国としてだけでなく、アジアとヨーロッパをつなぐ重要なブレイヤーである中央アジア。日本企業の進出数はまだそれほど多くないが、今後のビジネスチャンスに目を光らせている企業も多い。その成長の可能性は無限大だ。

それぞれの国が自国の課題と向き合い、域内で手を取り合って開かれた地域を目指していく。日本もそんな中央アジアの持続的成長を支えながら、新たな関係を築き始めている。



過去から脱却し
新しい国づくりを

独立を果たしてからも、新たな困難に直面してきた中央アジア。旧ソ連時代のインフラを生かし、国の発展につなげようと、さまざまな努力が続けられている。そこで一役買っているのが日本だ。

同じアジアでありながらも、どこか遠く感じる中央アジア。それもそのはず、日本からの直行便もウズベキスタンの首都タシケント行きのみで、日本人観光客もそう多くない。

しかし実はそんな中央アジアの国づくりを、日本は各国の独立以降、

オールジャパンで支えてきた。2004年には外務省がイニシアチブを取って「中央アジア+日本」対話の枠組みを設立。その中では特に、中央アジアの域内協力を推進している。「日本が他国のドナーと違う点は、政治的な介入なしに、中立的な立場で支援できることです。日本が間に入って情報共有の場を持ち、共に解決に取り組みれば、地域としてもっと発展できるはずです」と杉浦准教授は話す。

これからの課題に
地域一体で進む

この枠組みの柱は、貿易・投資の促進、環境/省エネ・再生可能エネルギーの推進、ミレニアム開発目標(MDGs)の達成と格差是正、アフガニスタンの安定化、防災分野の協力。JICAはこれらを後押しすべく、有償・無償・技術協力を効果的に組み合わせながら、運輸交通、小規模電力のインフラ整備、農村開発、ビジネス振興などを通じて、中央アジアの持続的な成長を支えている。

さらに近年は、国境を接するロシアや中国、アフガニスタンなどとの